

曲り角

昭和49年7月第1号

体育心理専門分科会シンポジウム

『体育における態度変容の問題』について

筑波大学 加賀秀夫

身体運動の経験が態度の変容に及ぼす影響をめぐって検討したい。(1) 理論的・実験的関心から、(2) 教育現場的関心から、(3) 臨床心理学的関心から、それぞれの領域でとりあげている態度と、それに変容の生じる機序およびその要因などについて、研究の現状と問題点を明らかにしながら、問題意識や理論・方法の異同を浮き彫りにして、今後の研究の発展に資したい。

なお、サブテーマと発言者は下記のとおりである。

1. 身体運動が感情や認知に及ぼす影響—均衡理論の立場から— 奈良女子大学 丹羽 昭
2. 体育実技に対する態度の変容とその要因 九州大学 徳永幹雄
3. 自己認知の変容—スポーツ臨床心理学の立場から— 青山学院大学 長谷川浩一

レディネスと臨界期について思うこと

名古屋大学 勝部 篤 美

ゲゼル以来、学習におけるレディネスの重要性については、多くの心理学者が指摘してきた。これが教育の現場では、いわゆる「待ち主義」の教育として受取られてきたきらいがあり、偏狭で性急な能率主義の信奉者から

は反感をもたれていたようである。

これに対して、約20年ほど前から、ローレンツやマグローたちのような心理学界での幾つかの実験に依拠して、臨界期を重視する考え方が招頭し、今ではわが国においても知

的教育や芸術教育の世界で可なり滲透して来ており、早期教育の理論的支柱となっている。さらに、最近では体育界においてもこの傾向が現われはじめている状況である。

わたくしは、レディネスと臨界期との関係について、平素思っていることを、ここでまとめて見ることにした。

先ず、レディネス重視はどちらかといえば構造論的であり、臨界期重視は同様に機能論的であるように思う。別の表現をすれば、レディネス重視は発育重視に傾斜し、臨界期重視は発達重視に傾斜していると思われる。しかし、元来、構造と機能、発育と発達とは対立する概念ではなく、相互に有機的な関連をもつ一体的なものであらねばならない。それを最近ではレディネス重視は古い考え方であり、臨界期重視こそ新しい立場だというように、両者を二者択一視する傾向が生まれているが、これは或る意味では危険なことではないだろうか。

どのように機能を重視しようとも、その前に必ず構造が存在するはずである、言語教育、数教育、芸術教育等において早教育が望まれるのは神経系の機能が早期に発達するからであるが、その前提として140億もの健全な脳細胞が存在するという事実を無視することはできない。また、這う頃には泳ぐことができ、よちよち歩きを始めればローラースケートもすぐ上達するというような実験例も、這う程度の、泳ぐ程度の、歩く程度の、ローラースケートをする程度の、それぞれに必要なだけの筋の発育ができ上っていなければならぬ。

そこで、このような両者の関係について、わたくしは以前に「いれものが先き、中味があと」という表現で書いたことがある。同時にそのいれものは陶磁器のように容量が不変の固定的なものではなく、中味の充実に応じていれものは拡大され、いれものの拡大に応じて中味は充実するというような弾力性に富

んだいれものであることを指摘しておいた。

このように、わたくしはレディネスと臨界期との問題を対立的にはとらえず、相互関連のそとにとらえようと考えているのだが、最近とくにこのような考え方を強く持ちはじめている理由には、わたくし自身の行なった2つの研究の結果が関係している。我田引水めいて恐縮だが、参考までにその大要を紹介することを許しいただきたい。

①<幼児の運動能力には、からだの大きさ、運動経験の豊かさとは、どちらが大きく影響しているか>という問題を調べた結果では、パワーが主因となっている運動ではからだの大きさの方が影響力が大きい、巧緻性が主因となっている運動では運動経験の方が影響力が大きいという結果を得た。

②<幼児の運動負荷と脈拍数>との関係について多種目の測定を行なった結果では、激しい運動を課した場合、運動終了直後の脈拍数は安静時の脈拍数よりも一過性に減少し Negative Phase が現れること、Negative Phaseの発現率は低年齢ほど高いことなどが明らかとなった。

僅かな研究結果から大胆な結論を下すつもりは毛頭ないが、以上のことをふまえて、次のような予測をしているのだが、いかがなものであろうか。

① 運動の巧緻性の発達のように神経支配と密接に結びついたものは、他の知的学習などと同様に早期教育の成果が期待できる。

② しかし、パワーや循環機能の発達が大きく関与しているものは早期教育の成果はあまり期待できないし、場合によっては障害のおこる危険性さえ感じる。

③ したがって、運動学習では各器官系統別ないしは体力構成要因別のレディネスの時期的スレ、動作内容の類似性などによって、おのずからそれぞれの臨界期が決定されるものであろう。

地理的人間と歴史的人間

日本体育大学 長田 一 臣

数年前からモヤモヤとしていた創造性の問題について、更に具体的な形で考えをすすめている最中に、鈴木紀夫という青年がルパン島で小野田少尉と接触するという事件がおこった。この二人の人間像が忽ち筆者の頭の中なかで創造性の問題と接触事故をおこしたという次第である。

Getzels と Jackson は創造性テストと一般知能検査の結果から、高知能群と高創造群との間の質的差異について報告している。すなわち、高知能群が収束性思考 (convergent thinking) を特徴としているのに対して高創造群は発散性思考 (divergent thinking) を特徴としており、認知の性質に就いても前者が保存的認知 (conservative cognition) をするのに対して、高創造群は建設的認知 (constructive cognition) をする傾向があるというのである。

この原理を小野田、鈴木両者の場合に当てはめてみると可成り明瞭な、ある振り分けができるように思われるのである。つまり、小野田少尉は、その植物的性格をもって一定地域に、歴史的に垂直的に根を下ろすふりがあり、鈴木青年の方は三年八月の間に世界50数ヶ国を大放浪するという動物性をもって地理的、水平的に転々と容易に位置移動をする性格をもっている。

前者は与えられた命令、大義明分を金科玉条とし、高知能群が示す「一つの正しい答」に対する反応形式をもち、後者は学校にゆくよりも海外旅行をした方が価値があるという認識のもとに、いわば「欠けた問題」に対して多方面の「答」を探索するような高創造群的反応形式をもっている。前者は極めて sollen 的で当為の世界に住み、後者は sein 的でその

生き方は極めて現実的、経験的であるというちがいをみせている。

性格類型的にみた場合、小野田氏は典型的な粘着性気質を示し、鈴木青年はこれ又特徴的に躁うつ性気質の傾向を示している。すなわち、小野田氏は几帳面きまじめでコツコツと粘って息が長いが、融通性に乏しく頭の轉換に手間どる。理詰めで納得した上で動き出す性で、いったん思い込むと固執的で容易に説を変えない。我慢強く、日常の態度はいんぎん丁寧だが、異常な爆発性を秘めている点などその後の小野田氏によく示されている。物品をきちんと保存し、克明にメモされており、容易に発見されなかったのは生活の跡始末が異常なほど行き届いていたためである。

一方、鈴木青年は誰とでもこたわりなく親しむ、あけっぴろげな性格で、元気で朗らかでよく働く。適応がはやく融通性があるため能率的であり、現実的で経験的である。意志的には一つのこと長くこだわらず、次々と移ってゆくという点では人間関係でも地理的關係においてもよく示されている。

さて、小野田氏は確かに思考の型からいえば収束性思考的で保存的認知傾向があり、鈴木青年は発散性思考的で建設的認知傾向にあるとあってよいだろう。ところで、創造性の点からいえば前者の垂直思考型より後者の水平思考型の方がよいのだといわれる。しかし、果してどうだろうかという疑問をもつのである。ある一つの問題について固執的で、とことん垂直に掘り下げてゆくのでなければ真の創造というのはいないのではないか。湯川博士は「創造的人間」の中で科学者の必要条件として「執念深さ」をあげている。

一本の垂直に打ち込まれた思考の心樫に向

かってあらゆるものが求心的に意味をもってくっついてくることが、逆に辿れば水平思考という形態をとることになるのではないか。小野田氏と鈴木育年は確かに垂直型と水平型という点で異質のように見えるが、夫々の方向において<執念深>く行動している点では共通したものをもっている。そして共に世間

的常識からかなりはずれている点で<はみ出し人間>である。常識の隠れ蓑を着て世間の流れに従って行動しておれば先ず批難されることはない。しかし、そこから新しいものが出てくる可能性もない。何かやって、叩かれた方がいさぎよいという生き方もあろうというものである。

お 知 ら せ

会員の皆様方には研究に教育に御多忙な毎日をお過しのことと存じます。

かなり間隔があいてしまいましたが、やっと曲り角をお届けすることができることになりました。

1. 昭和49年度体育学会の専門分科会シンポジウムについて

去る3月にシンポジウムについてのアンケートをお配りし、その回収をまって種々検討いたしました結果、テーマおよび演者とサブテーマが巻頭のように決定いたしましたので御報告いたします。

皆様の御意見として、この他にも、スポーツ適応、あがり、運動遅滞児に関するものなど臨床的な問題や、運動技術の把握、技術学習のメカニズム、運動行動の体制化などの運動学習に関する問題、さらには、評価、発達に関するものなどたくさんの提案をいただきましたが、最近シンポジウムでとりあげられていない領域がよいのではないかということで、体育における社会心理学的な研究のなかで最近比較的関心が持たれ研究が進められている態度の問題をとりあげることになりました。

また、昨年度は他の専門分科会との合同シンポジウムというかたちをとりましたが、今年度はアンケートに寄せられました昨年度の反省やテーマとの関係を考慮して、一昨年来

でのように本分科会が単独でもつようになりしました。

2. 日本スポーツ心理学会第1回大会について

去る昭和48年4月、日本スポーツ心理学会が結成されましたが、第1回の大会が本年10月10日東京にて開催されることになりました。また、機関誌「スポーツ心理学研究」の第1巻1号も発刊されています。くわしいことをお知りになりたい方は、日本スポーツ心理学会事務局（所在地 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部体育学研究所内）にお問い合わせ下さい。

3. 次号の刊行について

曲り角の次号は、シンポジウムの演者の方々の発表要旨の速報を掲載する予定です。

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和49年7月30日・発行

代表 松田岩男

編集 松田岩男

杉原隆

連絡先 東京渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究
室内体育心理専門分科会事務局

電話 (460)0511(代) (内) 36